

---

# 天空の虹

メイシア マルキュリア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天空の虹

### 【Nコード】

N7549C

### 【作者名】

メイシア マルキュリア

### 【あらすじ】

目と目がアツタ瞬間に・・・フタリは恋にオチマシタフタリはまるで時が止まってしまったかのように見つめあいお互いのココロに閃光のようにハシルものを感じていましたカミはキミとボクの望みを叶えられたキミとボクは命以上のイノチをかけて叶わぬ望みを叶えられたそのときキミとボクはアステイでカミに誓ったやがての日にはどんなことをしてもその恩愛にムクイルコトを・・・

**（前書き）**

レイとリンは互いが異世界に存在し愛し合っていた。  
レイは龍族の王子そしてリンは神族の姫だったから  
その実らぬ恋の行方は・・・・・・

遙か遠い銀河の彼方には神の御国があります  
金色に輝く美しいその国には大勢の神に近い存在が暮らして  
おりました

その隣には龍神様の暮らす白銀の御国があります

神王と龍王の約によりお互いの国はそれぞれ自由に行き来すること  
が出来ました

平和で友好的な交流が常に行われていたのです

神の国は龍神から授かる火・水・光の恩恵を受けて存在し

神の国では水に琥珀の命を吹きこみ龍神に捧げておりました

それは琥珀の雫・龍神の命の源でもありました

神の御国に龍神方が来られるときは

神とおなじ人の姿にその身を変えて訪なわれておりました

あるとき白龍王の使いでひとりの龍神が神の国の神殿を訪なつて  
いました

その龍神は真っ白なウロコに琥珀色の瞳を持つ白龍王族で

まだ青年になられたばかりの方でした

その時わたしは湖の岸边に設えた八角のレストに身を委ねて水面に  
躍るさざなみを見つめていたのです

神殿をあとに回廊を渉る青年がわたしの姿にふと目をとめたのでした  
わたしは彼の視線に誘われるように青年の顔を見上げたのです

目と目が合った瞬間に・・・何か閃光のように全身にハシルものを  
感じていました

ふたりはまるで時が止まってしまったかのように見つめあい

どれだけの時間が過ぎたのかもわからないほどでした

やがて青年はニッコリと微笑んで回廊を渡ってゆきました

わたしはその後ろ姿を追いながら不思議に高鳴る拍動を感じていました

青年が龍神の世界に戻られたあとにわたしは父王に尋ねました

先ほど神殿に参られた方は何処イスクの方でしょうと

父は・あれは白龍族の第二王子でレイというのだよ

今日は後に開かれるアステイナリアの祭りの事についての話合いに来ていたのだよ・と

その日からわたしの心には青年の琥珀色の瞳が住まい離れなかったのです

アステイナリアは年に一度行われる感謝祭です

この日は神族も龍神方ともに宇宙なる神に感謝をあらわしその存在を喜び讃えあうのでした

今年は神の御国に龍神様方が招待されるのです

きつとそのときに逢える

わたしの胸は高鳴りを抑えることが出来ませんでした……

アステイナリアの日

その日の国は喚起の渦に包まれておりました

白龍王族の方々は神殿に招かれて・神王族との宴が始まっておりました

もちろんあの青年の姿も……

でも彼は神王方への社交に忙しくて言葉を交わすことも出来なかったのです

わたしは視線で彼を追いながらも今日は無理そうとあきらめがちに宴の席を立ち

湖の岸辺に設えられた八角のレストにゆきました

わたしはレストに身をゆだねて水面にその青年の姿を映していたのです

そのとき水面を見つめるわたしを後ろから呼ぶ声がしたのです  
・リン・・・と

青年がふと現われたのです  
振り向いたわたしの瞳に映ったのはあの微笑む姿でした  
わたしが戸惑っているとおあなたは風のように傍にきて  
わたしを見つめて言ったわ・・・

キミに逢いたかった

今日はキミに逢いにきたんだ・と

わたしは戸惑いながらも  
どうして・わたしの名前を知っているの・・・と尋ねるとあなたは  
キミの父上から聞いたのさ・と・・・

ふたりは夕日の煌めく水面を見つめながらひとときを語りあつた  
そのときあなたは言った

瞳があつたあのときからキミのことが忘れられなかった

キミに逢ってボクの気持ちを話したかったんだ・どうしても  
だから内緒でぬけだして来てしまった

ボクはキミ・のことが・・・スキなんだ・・・と

リンは・・・リンも・・・あなたと瞳をあわせたときから  
あなたのことが・忘れられなくて・・・

そう・・・リンも・・・あなたがスキ・・・なのです・・・

わたしはあなたの腕に抱かれてとけるように身を任せていた  
当たり前のようになあなたと頬を合わせ目と目を合わせて  
そして夕暮れに紅く染まる光の中で・・・キスを・・・  
その日からあなたとの密やかな恋がはじまったのです  
ふたりは決してあいま見えることのない世界にありながらも  
深く愛し合っていたのです

レイがススカゼを使ってわたしの頬を撫でるのがふたりの秘密のアイズ

リンはそのアイズがあると何をしていても手をとめ足どりと跳ねて弾むように湖のレストにいった

・ススカゼが頬を撫でる・

アア・レイ・・・レイ・レイがくる・・・

レイはいつもわたしをソラへ連れだしてくれた

一緒にソラを駆け巡るときだけがふたりにとっての真実でした

レストで水面を見つめているリンに後ろからそつと近づいて

そのカイナに抱きあげ白龍のスガタとなってソラへ 飛び出してゆく

レイはわたしを抱いて息もつけない速さで飛翔する

そして反転して急降下

そのまま湖の水面に飛び込み水のトンネルを潜り抜け

その跳ね上がる飛沫に虹が現われたわ・・・

時には竜巻を起こして

リンを包んで噴水のように押し上げ跳ね上げて

ソラをタユタイ一片の木の葉のように落ちるリンをあなたは後ろからふわりと抱きすくめて・耳にやさしくリンと囁いてクチヅケをしてくれた・・・

レイ・あなたはいつも全身全霊でわたしを慈しんでくれた

リンが寒さに震えると温かい息を吹きかけて優しくカイナに抱いてくれた

アツクほてる時には花咲く丘をそよ風のように飛びながらはこんでくれたわ

レイ

リンはあなたを愛しているの

逢う度に心もカラダもあなたでいっぱい

レイ

あなたと変わらぬアイを誓ったわ

レイ

アイは進化するのね

アイは変わらぬのではなくて育つのね

あなたへのアイはとどまることなく今も膨らみ続けているもの・・・

ボクがキミを抱いて銀河を飛び越え星の中を抜けて縦横無尽に飛回ると

キミはお陽様のような笑顔で歓んでくれた

ボクはそんなキミを見るともっと高くさらにスピードを上げて飛び廻るのだった

星のアタリを抜けてソラの彼方へ

キミの好きなホノホシの砂浜

そして誰も知らない星影の秘密の洞窟

ボクとリンはそこで睦みあった

何故なら龍族と神族の世界の者は存在する世界が異なりひとつにはなれなかったから

ボクとキミはタブーを犯していた

でも愛する心はトマラナイ

キミはそのときボクに言ったね

レイ・あなたのセナにわたしをのせて共に宇宙<sup>ソラ</sup>を駆け抜けましょう

レイ・あなたの角は気高きアカシ・天を指し示し正義を問う

あなたのたてがみは真白き雪のよう・風にマイユレル白銀の耀き

あなたの蹄は力強く大地を蹴りそのイナナキは天地に轟きわたる

レイ・あなたの姿をみたものは心打たれヒザマズクそして心魂をも



ユサブル

あなたの瞳は黒く深い夜の闇

あなたの瞳は昇る朝日に似た気高き炎

あなたの瞳は夕暮れを彩る宵空の暁

あなたの瞳は碧くタユタウ海の色

あなたの瞳は漣を湛えた朝露の色

あなたの瞳は闇を妖しく照らす赤月の色

レイ・あなたの瞳は七変幻・時と事の現れに変幻する

レイ・あなたがわたしを見つめる時は古から変わらぬ琥珀の蜜色

あなたのセナにユラレル夜は星に跳ね月に跳ね銀河に跳ねて

遠き過去から永久の未来へ流転の渦をくぐり抜け光り溢れる神の庭  
井へ

レイ・あなたの願いはわたしの望み

あなたのセナにユリユラレ天の宇宙<sup>ソラ</sup>を駆巡る

あなたとならば夢幻の旅路へ

あなたとならば無限の彼方へ

あなたとならば遙か遠き命の果てまでも

あなたのセナにユリユラレ・天の宇宙<sup>ソラ</sup>を駆巡る・・・

リンはボクの永遠の女神

キミのすべてをボクは愛する

リンはキヨラで美しい

愛深くケガレなきその心はすべてを癒やしてくれる

リンの声・そのささやきがボクの名を呼ぶ時

ボクは喜びにウチフル工勇気とチカラが湧きいずる

リンの瞳のなかにある深い光

キミを正視出来るのはボクだけ

それは同じ輝きを持ち同じ憂いを湛え同じ希望に溢れているから

リンのうつしみ

それはボクとアイあってひとつに融けあい限りなき世界へと飛翔する

いとしいリン

キミを想う心はひろがってゆくばかり・もうとどまることを知らないよう

ボクはキミに応えたい・・・・

何時からかふたりの逢瀬は互いの国にも知れわたっていた

でも誰もとがめだてはしなかった

それは誰もがその恋を实らぬものと知っていたから・・・

ボクは龍そしてリンは女神だった

けしてマジワルことのない現実にもはじめはそれでいいと思っていた  
しかしアイアエナイその切なさ酷さはボクの身を焦がし胸の内を力  
キムシル

ボクは自分の在りのままを恨んだ・・・キミと存在する世界が異なる  
龍である自分を・・・

そしてあるとき星影の秘密の場所でボクはキミに言った

リン・・・あの蒼く燃える星に飛び込んでボクとひとつになろう・・・

・と

キミは何も言わずにボクを見つめて・・・ただこくりと頷いた・・・

・

ボクはリンをカイナに抱きしめた

ただ・・・ただ・つよくつよく抱きしめていた・・・

リンの大きな黒い瞳からは煌めく雫が溢れていた

ボクの瞳にも・・・リンが霞んで見えなくなるほど・・・

ボクはリンを抱いて蒼碧に燃える太陽のように燃える星に飛び込んだ  
まわりからは狂ったあげくのフルマイに見えたことだろう

何故ならその蒼碧アオミドリに燃える星はその現れの姿を焼きつくすばかりで  
はなく

その魂も霊もすべてを焼き尽くしこの宇宙から完全消滅するといわ  
れていたのです

ボクはリンとひとつになれないのならば自分のすべてを消滅したかった

リンとひとつになること意外に望みはなかった  
リン・・・キミも同じようにそう思っていたね・・・

ボクはキミと融けてひとつになれることを信じて燃える星に飛び込んだ

レイとリンは燃えるアオミドリ蒼碧の炎に包まれた

ボクはキミの目を見つめ

キミはボクの目を見つめていた

白龍のボクにしっかりと擁かれ頬を寄せあつて・・・

炎は凄まじい轟きを上げてふたりを包みこみ

ふたりの命今まさに消えようとしていた

龍神界や神界のチチハ八達はふたりの結末をいたく嘆き悲しんだのです

その悲しみの声は宇宙ソラの果てまで轟いたほどでありました・・・

そしてその時・レイとリンは宇宙なる神に擁きとられたのです

気がつけばキミとボクは神の御胸アステイの中にいたのです

キミとボクは生まれる前の赤子のようにひとつの繭の中で融けあっていた

キミとボクは融けあいひとつになっていた

神は望みを叶えられた

キミとボクは命以上のイノチをかけて叶わぬ望みを叶えられた

その時キミとボクはアステイで神に誓った

やがての日にはどんなことをしてもその恩愛に報いることを・・・

・

アステイは神の庭井に建てられている八角の神殿

ガラス張りで窓には風に揺れる白絹のカーテン

部屋の中央に置かれた寝台

穏かな慈しみのときの中でアイをかわしあうふたり

キミとボクはカイナをアワセ瞳をカワシ

コトノハをカワシ

アイをカワシアツテイタ

ボクはリンをカイナに擁き

リンはボクの胸で寛いでいる

ボクはリンの横顔を見つめて引き寄せられるようにキスをした

キミは応えるように唇をあわせてボクの名を呼ぶ

ボクはリンの声に応えてキミの名を呼ぶ

掌はリンの体を撫でさすり肌をすべるように愛撫する

リンは切なさうに身をくねらせてさらにクチビルをつよくあわせて  
ゆく

ふたりは平安に満ちていた

リンはボクにその身を委ねて膝の上でタユタユと揺られている

リンはスズオトを響かせるようなその声で唄を歌っていた

ボクはリンの唄に合わせるように鼓を打ち鳴らし

キミのスズナル唄とボクの鼓は

アステイの神殿に不思議なハーモニーを奏でていた

ボクがまどろむとリンはボクのムネやカイナにキスをして

柔らかく嚙んでボクのカラダを愉しんでいた

ボクが目覚めるとムネやカイナにはキミのアカシが残っていたもの

ボクは眠っているリンを抱き寄せてコメカミにキスをした

キミはまどろみから眠たげな目を薄く開けてボクを見つめた

キミはとろけるようにぼくにすべてを委ねていた

ボクはリンがすき・・・と囁くとキミは

リンはレイがすき・・・と優しい笑顔で応えた

ボクはリンをずっとずっと遠い未来の果てまでも愛している・と言  
うと

リンは・・・リンはずっとずっと遠い未来の果てまでもレイを愛している・・・と応えた

アイアワセ 紡ぐ双子の物語 宇宙<sup>ソラ</sup>の庭井に響く鈴音

ボクはリンがすき

ボクの心はキミでいっぱい溢れている

ボクはリンがすき

ボクの瞳の奥にはいつもキミが映って眩いばかり

ボクはリンがすき

ボクの耳にはいつもキミの囁く声が響いている

リンはボクと心も体もふたりでわけあった

リンはオミナでボクはオノコ

だからふたりはひとつになれる

リン

ボクはあの日の切なさを忘れはしない

キミを愛する心の内をすべて語ったとしても

どうして語りつくせるだろうか

愛するリン

愛しいリン

キミとボクの睦みはそんな想いの果てにある

想う心の深さ大きさは言葉で現わすことなどできはしない

いつかずっとキミだけを見ていられる日がくることを信じる

リン

キミがすき

すきなんだとてもとても

ボクのマインはリンでイッパイ

ずっとキミとひとつになりたかった

リン

ボクはキミを離さない

いつもキミを見つめ  
キミとふれあい  
コトバをかわし  
カイナをあわせて  
キミを愛しむ  
キミを愛している  
愛しているんだ・リン  
ボクが愛するのはキミだけ  
キミだけなんだ  
愛しているよ・・・リン  
ボクの心はフルエテイル  
キミへのアイにフルエテイル

わたしはレイがすき  
あなたの姿をわたしは慈しみました  
たとえ報われなくてもわたしはあなたに命を預けていました  
わたしが愛したのは有りのままのあなた  
わたしの恋はあなたを一目見たときからあなたへ一途に真っすぐに  
あなたへの想いは果てることなく  
あなたはわたしのすべて  
リンはあなたを愛しています  
あなたはわたし  
わたしはあなた  
レイのすべてを愛するの  
琥珀色に輝くその瞳はいつも冒険を夢見る少年のよう  
わたしを見つめる深い瞳  
あなたの目に映るものを観ていたい  
あなたの手にふれるものを感じていたい  
あなたの吐息あなたの拍動  
わたしのすべてはあなたとひとつになりたいのです

レイとリンのアイは時空を超えて

アイは未知の彼方へ

アイは無限の歓びへ

アイは宇宙<sup>ソラ</sup>を駆け巡る

レイとリンは真実のマツタキアイを現わした

今まで誰も知らない宇宙<sup>ソラ</sup>のアイそのものを

人は知らない

まだ誰も知らない

けれども神は知っている

神々も知っている

真のアイの素晴しさを

そのアイを知ったなら世界が変わりすべてが変わるのだから

それからふたりはアステイを巣立ち

地球から遠い銀河のとある星に暮らしていた

そこは飢餓も紛争も天変地変も無い

人々はアイの心のままに平和を実現しているかのようだった

そこではキミは王室の教育を任されて王家の童男童女を導き

ボクは他の星との連合政府の秩序を守る連隊長のような仕事をして  
いた

王室の神殿は民に開かれていて出入りは自由だった

民は王を尊崇し王は民を尊んでいた

ボクは王への報告等でいつも王室の神殿に出入りしていたのです

マウルス・アルテシアそのときぼくはそう呼ばれていた

そしてキミはメイシア・マルキュリアだったね

白い神殿の周りの庭にはたくさんの花園があり湖があった

ボクが神殿を訪なうときは必ずキミに逢いにいったね

ふたりで神殿の花園を散歩したり湖を見に行った

僕は歩きながらもよくキスをしていたね  
キミと瞳がふれあうともう引寄せられるかのようにキスを・・・

そんなふたりを星の人々は誰もが知っていた  
僕は星の人々に見守られるなかで

ボクはキミを愛しキミはボクを愛していた

ボクはキミの瞳の奥に神を憶え

キミはボクの瞳の奥に神を観じていた

その星では時空を超えてほかのどの星のどんな所も垣間見ることが  
できた

だから僕は知っていたんだ

多くの嘆き悲しみ苦しみ痛みに苛まれ

また今まさにそうなるうとしている星々が

この宇宙<sup>ソラ</sup>にはまだたくさんあるということ

そしてキミはあの日ボクに言ったね

『それらの星の力になろう・・・』と

でもボクは知っていた

その星の人に転生してゆけば

やがてのうちにその星の風<sup>カルマ</sup>に吹かれ浚われて

たとえ元<sup>ハジメ</sup>がどんなに尊い存在であっても

二度ともたに戻れなくなることがあるということ

そしてその事業はアステイで大宇宙のマツキアイを現わした

ボクとキミにしかできないということ

以前からボクはそのことを考えていたんだ

でもボクはキミに言わずにしていた

そんなボクの心を悟ってキミから志願してくれたのだったね

『大丈夫 あなたとなら必ずうまくゆくわ』そう言ってキミは微笑  
でいた



それから僕達は星の王に志願して  
神の導きのもと遙か遠く離れたとある銀河の星に生まれた  
僕達は地球という星に転生したのです

ボクとキミは地上世界に生まれる前にそれぞれの道程を決めあつた  
でもそれは並大抵のものではなかったのです  
数千年もの間何度も粉々に碎けてしまうほど身を焦がし魂に焼きつけ  
誰も通ることの出来ないような嘆きと悲しみと苦しみと痛みに彩ら  
れたものだつた

ボクはこのような道程をキミに歩ませなければならぬことが切な  
かつた

でもキミはにつこりと微笑んでボクに言つた

マウルス・アルテシア

あなたはすべてのク・ラク・キ・リコを解き放ちイキトシイキルす  
べての求めに応じて御身御心を惜し気なく差し出し命も厭わない  
あなたはヒト・モノ・トキ・コト・ユキユクすべてにアイとチエを  
授け導くために生きてゆくでしょう

わたしはあなたの働きをただ御傍で見守りゆきます

たとえどんな人生をくぐり苛まれても

あなたとわたしのアイは不変

もしもあなたと離れて迷つたときはあのアステイのときのように唄  
を歌うわ

それを風がきつとあなたへ運んでくれる

そしたらあなたは私を探し出してくれるわ

わたしは迎えに来てくれるのを待っています

そしてあのホノホシへ連れて行って

あなたはいつどんなときでもきつと必ず迎えに来てくれる

わたしは信じています

そのときにわたしの心に絡んだカルマの糸をあなたは一つひとつ解きはなち

こびりついたカルマの殻を一枚いちまい剥がしてくれるでしょう  
遙かな過去から永久の未来まで

あなたとわたしのアイは永久不滅

どんなに離れていても空と道はあなたへと続いている  
風が空を渡りわたしの知らせをあなたのもとへ運んでくれるでしょう

メイシア・マルキュリア

ボクはもう次の瞬間に何があっても躊躇はしない

今はすべてを神に任せる

ボクは望まれるようにただ生きる

キミと永遠のアイを成就する為に

過酷な運命に苛まれようとキミとともになるものならばそれも願うこと  
となれど

ボクとキミは一枚の布をひき裂かれた様な人生を数千年の間刻まなければならぬ……

でも・わかっているよメイシア

もう後戻りはできない

キミのボクへのアイはボクが誰よりも知っている

ボクもキミへのアイを信じる

キミをアイする心はこの宇宙<sup>ソラ</sup>よりも高く

時空を超えて拡がってゆく

キミとどんなに離れても

キミの唄が届いたならボクはキミを探し出して迎えに行くよ  
きつと……必ず

そのときはすべてをボクに委ねて

キミはボクのカイナでタユタユとユリユラレ

元の世界のアステイへと運ばれることだろう

メイシア・また・笑顔でキミに逢えるその日まで

キミを愛しています・・・永久に・・・

そのとき光り輝く朝日が昇り虹が天空に現われて  
僕達ふたりを照らしあわせるのだった

やがてキミとボクは別々に地球世界に生まれおちたのです

そのときの僕たちは生まれは別々でも神の導きによって必ず出会って  
いました

初めはあまりにも違う星の環境に戸惑うばかりでした

何故なら肉体も魂も人もその感覚もまったく元の世界とは異なること  
ばかりだからなのです

その肉体と魂を纏うことそのものが想像を絶するような感触なので  
した

しばらくすると他にも外から転生している方々がいることを知りました

その方々が家族となり友人となり手とり足とり導いてくれたのです  
何度かの転生で地球の環境や肉体感覚にも次第に慣れていました

あるときキミとボクはインディアの大地にいたのです

そのときもふたりは神の導きのもとに出会い愛しあっていました  
キミとボクは初め同じ師<sup>グル</sup>のもとに帰依していました

僕達は神のアイを現わそうと日々を修行のうちに過ごしていたのです  
しかしその時代の私達<sup>グル</sup>の師は男女の性を否定しておられました

何故ならその時代の男女の性は乱れに乱れていてその影響は計り知  
れないものがあつたからなのです

ボクはいつか師のこころに従いキミを遠ざけて修行するようになって  
いったのです

そんなボクにキミは不信を感じてか

あなたはどうしてわたしを避けるのでしょうか・と

幾度となく訴えてきた

そしてある日ボクは悩んだあげくにキミに告げたのです

もう此れからは一緒にいることは出来ない

でも君は受け入れなかった

キミは言った

ふたりでいなければアイをあらわすことは出来ないはず

それなのになぜそんなことを言うのです・・・

あなたはあの時のわたしとのアイを忘れてしまったのですか・・・

・

そうだわ

あなたは師の教えに惑わされているのね

わたしが師に会って訴えます・・・

さてよ・・・ボクはキミの腕をつかんで止めた

師のおっしゃることは正しいのだよ・ボクは師を信じています

だから・・・だからボクの言う事を聞くんだ

ボクは力尽くにキミの腕をつかみ必死の形相でキミを睨みつけていた

キミは・・・それならば・それならばわたしは死を選びますと言っ

て黒い大きな瞳から止め処もなく涙を零すのだった・・・

だが神を求める道を断念するわけにはいかない

その時ボクは譲らなかった

ボクは神より生を受けてその命を自ら絶つことは断じて許されざる

こととキミを叱りつけキミの頬を叩いた・・・

キミはそのときしばらく切なげにボクを見つめていたがやがてボク

の前から立ち去っていった

ただの一度も振りかえらずに・・・

それからしばらくしてキミが女ヨギになったことを風の噂に聞いたのです

キミはガウリー女神（シヴァ天の神妃）に帰依しその神とひとつになろうと修行していた

ガウリー神は力強い十八の腕を持ち

その腕にはさまざまな武器を携え

恐ろしい魔を打ちひしぎ

足下の蓮華の下にはアスラのマヒシャを踏みにじっている

お乳はあらわにそのままで

腕や腰に金属の輪のような力ザリものをつけているだけの姿だった

キミはガウリー神と同じその姿で趺坐しヨガをしていた・・・

『神は無一物・・・だから私も無一物なのです』と

キミは何も所有せずその身は何も纏ってはいなかった

キミの乳房はもちろんハナビラも人の目に晒されていた

人々は美しいヨギを見に押しかけた・・・

中にはキミを真の神の化身と崇める信者もいたでしょう

でも大半は好奇心と興味で集まった者達であつたのです

そのときキミは面前にぬかずくたくさんの信者に崇拜されることに酔っていた

ひれ伏す男たちを弄ぶことに快感を覚えていたのです

それはボクへの当てつけでもあつたでしょう

でもボクにはキミの気持がわかつていた

キミはボクの曇った目を覚まそうと自ら身を投げ出していたんだね

ボクはキミを傷つけた

修行に邁進するあまりに真実のアイを忘れていたのです

あの頃のボクはまだ何もわかっていなかった・・・

そしてそれ以来キミはボクの傍を離れて転生をしていったのです

やがてボクは日本に転生をして神道を歩みはじめていました

キミはインディアからユーラシアそしてヨーロッパへと転生していったのです

今回の生涯でキミとボクは再び巡り逢えた

今生初めて出会ったときのキミは全身に氣を漲らせ

ひとりでだつて何でもできると言わんばかりの様相をあらわしていた  
もちろんキミがキミでボクがボクだということは初めて目と目があ  
つたその瞬間にわ  
かつていました

思えばキミと離れてからの幾千年

キミはどんな想いをしてこの地上の上に暮らしてきたことだろうか  
そのすべてをあらわして余りあるようなキミの姿に

ボクは始め戸惑を感じていたのです

でもボクはキミと話したかった

キミとのアイを取り戻したかった

幾千年逢えなかった時間

ボクはキミにずっと謝りたかった

ボクが・・・間違っていたと・・・

でもキミはきつとこう言うのでしよう

あの時はしかたがなかったのよ

あなたは一生懸命だったわ

本当は私も悪かった・・・

あなたに叱られてもそれでも

たとえ遠くからでもあなたを見つめ続けていれば良かった

でも私はあなたに気がついて欲しかった

だから私はあなたと違う方法で神になる修行を選んだの・・・と

今回の生涯で神はチャンスくれた

キミとのアイを取り戻すチャンス

ボクはキミにいっぱい話をした

神のこと宇宙のこと其れからソレカラ・・・

でもキミはやっぱり

あのインディアの時代キミからのことを忘れてはいなかった  
きつとボクを恨んだことだろう憎んだことだろう

でもそれはボクを愛するが故のことだということも知っています  
あの時代からのキミの悲しみは  
今も癒えてはいなかったのですね……

今生再会してからのキミは会うごとに少しずつ変わっていた  
強さが優しさに

硬さが柔らかさに

そして自信が恥じらいに

会うごとにキミの心もカラダも

ボクと愛しあっていたあの頃を思い出しはじめていたんだね

その頃からキミはすべてをボクに捧げたいと心で言っていたね

でもボクは知っていながらキミと距離をおいていた

キミを受け入れればボクはどうなってしまうのか自分でもわからなかったから

キミを愛する心を抑えられなくなってゆくだろうと思っていた  
その時すでにボクにもキミにも家族があったから……

ボクがキミを愛したならば

きっとお互いの家庭は壊れてゆくだろう

ボクは神を裏切るようで不安でそして怖かった

だからインディアの時のようにキミを愛することを間違っていると  
思い込もうとした

あの修行に邁進してキミを見捨てた時代と同じように……

キミはそんなボクの態度を悟って今回の生涯ではこのままでもいいと  
心の中にボクがいればそれだけでいいと想ってくれていた

それからボクはキミの住む街から離れた

ボクはキミのことを諦めていた

キミから逃げていたんだ

それなのにキミは心の中でいつも

再会したあの日からずっとボクの心に呼びかけてくれていたね

イチ姉さんもそんなキミを見ていられなくなってボクの所まで来て  
くれて

キミの便りを聞かせてくれた  
お土産にお米を運んでくれて・・・  
ボクは少し・・・頑なだった

今回の人生でキミは南の地のアマミのアサドに生まれ  
ボクは北の大地のユウバリに生まれた

キミは水のセイでボクは火のセイ  
キミもボクも幼い頃からずっと堪え偲んできたね  
世間の挟間で・・・

誰一人理解者は無く  
わかってもらえる人もいない

そしてそのまま一生を終えてもいいとさえ思っていた  
それは自分以外が大切であつたから

でもステキなことも

それは人と出会えたこと

友人に

家族に

子供達に

そしてキミにも再び

お米は田に育まれる

小川から田には水が灌がれ稲穂が育つ

アイを育てよとボクは後ろを押されたような気がしたよ

そしてあの日キミとボクは再びミタビ出合い

そして愛しいひとつになった

2006年11月19日

ミューズがビートルズのアルバムにキミとボクの今までとこれから



を現してくれた

アルバムを聞いているとそれがわかります

キミとひとつになった次の日に世界同時発売で・・・

キミとあの時に戻りたい

キミをリンと呼んでいたあの時に

あなたがわたしを迎えにきてくださったドシャ降り雨のあの日

黒くて大きなペガサスさん（車）は柩を運ぶ馬車のようにわたしの  
目に映りました

アア わたしを運んでくださる

只それだけが心を占めていたのです

あなたとわたしの 始まりと終わり

数多の別れと出逢いを繰り返し紡ぐアイを織り成してきた

髪飾り

神のアイに照らされて

御身の手もとから響くカムワタル音

アイに照らされアイテラス

髪飾り

朝陽に照らされ夕陽にユラウ

瞳の中に映るあなた

瞳の中に映るわたし

重なる影はひとつ

ふたりアイ鏡に映る

わたしのセナからカットしてゆくしなやかな腕  
流れるようにリズムを刻むシザー

あなたの腕が触れそうで

あなたの吐息がかかりそうな距離にいるのに  
触れえぬ所にいるあなたとわたし

もどかしくて切なくて

逢う度にまた逢いたくなるの

声を聞きたびに鼓動が高鳴るの

秘めた想いを貝に託して

込み上げる愛しさを珊瑚に託して

虹を渡り逢いにゆきたい

鏡は知っていたの

わたしの F i r s t   L o v e

あの日のボクとキミは心もカラダも

細胞の一つひとつまでがひとつに重なるうとしていた

ボクがキミのハナビラに指先でふれると

そこは閉じて渴いたイズミのようだった

ボクは・・・ボクは切なく心が張り裂けそうだった

ボクは込み上げる想いをこらえてキミのクリスにキスをした

舌でころがしなぞり剥ぎ取るかのように何度も舌で愛撫していた

やがてハナビラを舌でなぞりあげ

ツボミにもキスをして舌をさしいれた

ハナビラを押し開くようにキスをして舌を絡ませて

ボクの雫をハナビラにソソギイレタ

キミは呼応するように女神の唄を奏でていた

一時間ほどもクンニしていただろうか

やがてハナビラの奥からはミツが溢れて

ハナビラはやわらかくなっていた

それからキミはボクのシンを口に含み慈しんでくれた

ゆつくりとそしてときに激しく

ボクはキミの慈しみに応えるようにキミにキスを

それは長い年月を埋めあわせるようにゆつくりと深く

キミはボクに身を委ねて

応えるようにクチビルを合わせていた

キミの瞳からは雫がこぼれて頬を濡らしていた

今まで離ればなれになっていた間の寂しさと悲しみと切なさが一瞬に込み上げて

抑えようもないほどに哀しく切なく止め処なく……

気がつけばボクの頬も濡れていた

やがてボクはキミの中に入ってゆく

キミのハナビラは初めてのオトメのように狭かった

少しずつ入っては戻りながら奥へと入ってゆく

そしてシンのすべてをハナビラが包み込むようにシンとハナビラはひとつになった

キミを強く抱きしめるとキミの全身はフルエテいた

ボクが静かに動くとシンとハナビラは絡みあうようにアイあわされていった

キミとボクは時間<sup>トキ</sup>の過ぎるのも忘れて愛しあった

何度もナンドモ・何度もナンドモ

キミはステキだった・とてもとても

ボクは生まれて初めて女性を擁くような感覚を憶えていた

わかってはいた

キミと初めて出会った時からわかっていたのに

やっぱりキミとボクは唯一無二の存在だった

すべてがこんなにもあいあっていたなんて

こんなにも・こんなにも……

キミとこうしてひとつになるまで

ボクはなにもわかってはいなかったんだ……

以前にキミが撮った雲の写真はキミとボクの母星の王が乗る船……  
ユーキ

アステイにいた頃はアイをあらわす事はあまりに自然だった  
いまそれをこの肉体と魂で新たな意味意義価値を実践し創ること  
がボクとキミのあの日の誓いだっただ  
ボクは5人の子供を授かりキミは2人  
合わせて7人の子供達  
家族という人類とともにアイをあらわすことが  
ボクとキミのあの日の決意と誓いだっただね

7は宇宙で進化をあらわす意味の数  
子供達は地球の子供であり宇宙の子供達  
キミとボクのアイが成立ち  
すべてに現われゆきますように  
今あの日のキミとボクに還る  
あのアステイの時のレイとリンに      レイ

愛しいあなた  
あなたのアイが得られないと知り絶望と痛みを修行にかえて  
私はガウリーの化身として揺るぎない地位を築いたのです  
ただ魂はこよなくあなたを求めておりました  
その後の転生でもユーラシアを放浪し風の噂にあなたを訪ね歩き続  
けていたのです  
あなたが選んだ神への道を  
影ながらも支えることが出来なかったことを悔やんで  
星の導きに叛いたことも・・・  
わたしもあなたに逢って許しを請いたかったです  
けれどあなたを見つけ出すことは叶わず逢うことの出来ない絶望感  
から海の底に沈み  
アコヤ貝の中に閉じこもりわたしは何も感じない無になることを望  
んだのです  
ある時神様に拾われた私は

過去の記憶をすっかりと忘れ去っていました  
それから神様の寵愛のなかで過ごすうちにヤマトのアマミに生まれ  
たのです

幼き日々は人も自然のひとつにしか思えず文明の窮屈な世界には馴  
染めず

風や花や木や海と戯れて時の存在を忘れていることが多かったのです  
もしも都会に生まれていたら今のわたしはなく早々に命を絶つ  
ていたことでしょう

そんなアマミの自然の中で育った私がヨコハマの地を選んだのは  
神のお導きだったのだと今ならばわかります

初めてあなたと出逢い

瞳をあわせた時の想いは今でも忘れることは出来ません

あなたとひとつになれた時にあなたの瞳に映る私が見えて

その中に神が宿るのを観ました

そしてあなたと私の遙か遠い過去を見せていただいたのです

あなたと同じ星の同じ時代に今を生きていることを神に感謝いたし  
ます

過去の悔やみきれない過ちを繰り返すのはもういやです

だからあなたに会えなくてもメールが出来なくてもあなたを恋しみ  
慕い

慈しむ心を胸に宿して生きてゆこうと想っていたのです

イチ姉さんがあなたに会いに行くと聞いて

その目を通してあなたの姿を観たい

その耳を通してあなたの声が聴きたいと思っていました

私は

許されるならばあなたの奥様も子供達も自分の家族のように愛した  
いと思っています

きっとあなたも同じ気持ちでしょう

今生で結婚したワカヤギさんは若い魂ですが過去世に大陸を旅して

いたときに縁があつたようです

彼の子を身籠つて母になつた時に

今回の人生で夫と呼ぶのはこの人だけと決めていました

神の祝福と真実のアイが永遠となるように

家族を愛し続けることを約束します

今はSOMETHINGが流れています

リン

SOMETHINGはキミへの懺悔

インディアの時代にキミを追つてからのボクの胸の中は虚しさで一杯だった

その虚しさを修行に専念することでかき消そうとしていた

キミへの想いは修行を妨げる迷いなのだと決めつけて一心不乱に修行をした

でもキミへの想いは日増しに強くなるばかりだった

それからしばらくしてキミの噂を耳にした

キミが女ヨギになったことを・・・

そのときのキミの姿を知つてボクは愕然とした

それはボクへのあてつけだろうと思っていた

そう思いキミを憎むことでボクは自分を正当化し慰めていたのです  
キミの悲しみの深さも考えずに

それから幾度も転生を繰り返しその先々で人生を送つただけれど  
胸に残る虚しさが消えることは一度もなかったような気がします

SOMETHINGはキミへの懺悔のメロディ

きつとキミには伝わるだろう・・・

レイ

あなたの傷みが・・・響いてきます

わたしはあなたへの想いを胸の奥に閉じ込めて  
すべての欲を捨てさり顧みないことで

あなたを失った悲しみから逃れようとしていたのです      リン

キミはユーラシアを流離って旅していた時に砂の嵐に遭い砂漠に倒れたのです

キミは微かな意識の中でもうこれで終わり

これで神のもとへ帰れるとキミの命の火が消えかろうとしていた時に

キャラバンが通りがかりキミを助けたのです

そのキャラバンの中に過去世のワカヤギさんがいました  
意識が戻るまで彼はずっとキミの側についていた

キミは三日の間生死をさまよい

そして彼に命を助けられたことを知ったのです

キミは美しかった・・・

彼はキミを見たときからキミの虜だった

彼はキミを優しく扱った

キミは彼の思いを汲み

救われた命なのだからとすべてを捧げたのです

彼はキミに夢中になった

そのとき彼はキミのことを何があろうと誰にも渡すまいと心に誓っていたのです

私は彼の愛を利用していたのです・・・

生命を助けられたキミはそれから彼と一緒に旅をしたのです

どこかでボクに逢えるかも知れないという希望を胸の奥に秘めて  
そしてキミは彼の故郷ベネツィアへ連れられていった

そこでの生活はキミにとっては窮屈なものであったでしょう

彼は商人だったので付き合いが広く社交界などにもキミを連れだした  
そこに集う貴族の淑女の方々はキミの美しさが嫉ましかった

腹癒せにキミを異国の奴隷女と呼ばわって軽蔑のまなざしと言葉を投げつけて

キミを詰り笑いものにしたのです

彼も人前ではプライドがあつたのでしよう

そんな時のキミをかばってはくれず見て見ぬ振りをしていた

でも紳士の方々は違った目で君を見ていた

砂漠の中に輝くエメラルドのようなキミの魅力に誰もが惹きつけられていた

そんな羨望を受けるキミを所有していることにワカヤギさんは満足していた

キミはそんな紳士方から代わるがわる誘いを受けていた

キミもやがてその誘いに乗じるようになっていった

そんなキミをワカヤギさんは手に余るようになってゆき

ある事件をきっかけにキミを屋敷の中に閉じこめてしまった

キミはただ閉じ込められた部屋の窓から見えていた港の海を眺めていました

そのときのキミは海だけが心の慰めだったのです

彼はいつからか故郷の若い女性と暮らすようになり

キミを相手にすることはなくなっていました

しばらく後に彼は行商の途中で事故に遭って世を去った

この時のことをキミに伝えるのは辛い

でも過去を知って今を作り変えなければ未来は変わらないのです  
カルマの渦からキミとボクの運命を取り戻すためにも……

キミと離れてからのボクは倭<sup>ヤマト</sup>に転生していました

そこでは朝廷に仕えて神のコトノハを人々に伝える神占をする巫女  
だったのです

次には古事記の編纂に関わることをしていました



そして次の時代は親鸞上人の弟子となっていたのです  
このとき今の妻なる方と出逢っていたのです

妻が守護<sup>マスター</sup>霊様に夢で見せていただいたのは

ボクが無垢の衣に金糸銀糸で通ずられた僧衣で舞を舞っている場面  
でした

そのボクを妻は見つめていた

妻はボクを愛しく思ってくれていました

しかしそんな妻の気持は時代の激動にもまれて叶わなかったのです  
でも妻はボクへの想いを忘れなかった

今回の人生で夫婦になったのはこの時に定まっていたのでした

ボクの人生はキミへの懺悔とあの日のことへの自責の念で一杯だった  
だからいつも異性を遠ざけていたのです

親鸞上人と出会い弟子にしていた時

上人は他の仏道求道者とは違っておられました

この時代仏道では妻帯することは強く戒められておりましたが

上人は妻帯しておられました

上人は若き頃比叡山にて修行をなされその教えを学ぶほどに振り切  
れない迷いを感じ

やがて比叡山を降りて法然上人と出会い念仏の門に入られたのです  
あるときに一人六角堂の中に閉籠り座禅の行をなされたのです

そのときに如意輪観音様が上人の前に出現されて

私があなたに抱かれましようと女身になられ上人に抱かれたのだと  
・

それからち上人は妻帯されたのです

上人は私に求道者こそ妻帯せねばならぬ

万人が妻帯せず子生み子育てを放棄したならば

この世は百年もまたずに終わりである

求道者こそは万人と同じ境涯に身をおいて念仏他力の行を踏み  
御仏の本願を成就するのだと

私に教えられたのです      レイ

永遠の愛を誓ったのにあなたを裏切った私

あなたは倭の地に生まれてからも神に仕える道を歩んでいたのです  
ね      リン

キミと離れてからのボクにはそれしかなかった  
神の役に立ちたい

ただ一心にそう想い続けることだけがキミへの思慕  
キミへの懺悔だった      レイ

憶えています・・辛い過去・・封印したいほどの  
ヴェネチアの頃に中世のドレスを着た私  
その左側をワカヤギさんが歩いていきます

私はガラスを踏んで右足にケガを負い  
馬車に乗せられてどこかの教会のようなお屋敷に運ばれて  
ドレスとベールを着せられようとするの  
ケガの手当てを先に・・とひとりの方が言ってくださり  
右足から破片を取り出し  
傷を洗い手当てを受けて  
ブルーグリーンのドレスの上から  
白いベールを着せられて大きなドアの前に立たされた

このドアの向こうはイヤですとドレスを剥ぎ取り逃げようとするの  
ですが  
逃がしてはもらえなかった  
けれど花嫁になるのは免れて

それからわたしは彼の飾り物にされたのです

豪華な部屋に贈り物

監視も兼ねて身の回りのお世話をする人達

夜になるとわたしの部屋を訪れて今夜はこのドレスを着るようにと飾り立てられ

パーティーや社交場に連れていかれました

わたしはペットのように扱われ飾られたお人形のようにでした

逃げることも逆らうことも拒むこともできなかった

逃げることは諦めて心は荒んでゆきました

やがて男性の視線と甘い言葉に自惚れを覚えて傲慢になってゆきました

言い寄る方々には身を委ね彼に見せつけました

でも彼は何も言わなかった

その方々は彼の客人であり取引の相手だったから

愛する女を守ることも留めることも出来ない彼を私は蔑みました

彼はそんなわたしを扱いかねて

やがて遠ざけられて海見える塔に押し込められた……

辛い過去も

きちんと向き合ってカルマを消滅しなくてはならないのですね

犯した罪の重さに心が張り裂けそうです

神様は私を許してくださいさるでしょうか

赦されるならばどんな罰にも堪えて未来へと繋げたい

あなたと離れることだけはもう堪えられない

もう私をひとりにしないで

リン

リン

今回の人生をよく眺めてごらん

過去の出来事は形を変えてミニマムに現われていることに気がつく

よね

キミとボクは再び出会いボクはキミにエピソードを送った  
もうキミの罪もボクのキミを捨てた時の過ちも神はみんな許されて  
いるのです

ただカルマの残骸のようなものはまだ人生のあちらこちらに在るの  
です

それを今回で奇麗に消滅する為に

その為のミカエリでもあるのですね

キミもボクも数千年をかけてお互いをひき裂かれたような人生を生  
きてきたんだ

砂を噛むような生涯を現実に味わってきたのです

だからこそキミとボクが愛しいひとつになれた時になんとも言  
いようのない感動になったのではないでしょう

そしてその気持は時間が経つとともに拡がってゆくばかり

アア

すぐにでもキミのところへ行ってキミを抱きしめたい

けれどカルマの残骸はそれを容易に許さない

すべての過去はこれからの未来の為に必要なことだったんだね

レイ

ベネツィアで身も心も傷つき荒んだわたしは

次の時代に男に生まれました

イスラムのキングダムで神の使徒となり誰にも心許すことなく侵略  
と略奪を繰り返し

非情に人も殺し女も犯した

孤独で冷淡で誰からも恐れられていました

真実の愛から目を背け神の道から外れたわたしは

嵐の夜に天の裁きを受けて海の底に沈められたのです

リン

キミは人間に復習することを誓ったのです

ベネツィアの時に散々に罵られ虐められたからね  
それがキミの胸に宿り反逆してその運命となった

覚えているかい

キミとボクが再会した時のことを

キミの本当に復讐したかった相手は

他の誰でもない

あのインディアの時にキミを捨てたボクだったのです

レイ

覚えています

あの日あなたと目を合わせた瞬間に感じた様々な想い  
でも憎しみや恨みよりもこみ上げてきたのは愛しさでした  
私が天上界での神様との誓いの夢をあなたに話した時  
鏡に映し出されたあなたとわたしが見たふたりだとわかったの  
です

それから溢れるあなたへの想いにどうしていいのかわからずにい  
ました

あなたの送ってくださったエピソードがすべてを語っています

リン

ボクとキミはこの星に転生してから

半分は地球から頂いた魂と地球の肉体を持っているのです

認識や知覚は以前の星のものがあっても

感情感覚は地球の方々と何も変わらないのです

キミと離れてからのボクが自責の念にかられて懺悔と後悔の数千年  
を送ったように

キミはボクへの愛が憎しみと恨みとに変わった……

でも神は知っている

すべては神を愛するあまりの縛れからの出来事だったということを

レイ

千の夜と千の昼を超えてふたりの物語が結びあえた奇跡

神は朝に夕に

海に空に

風に花に

雲に虹に

日と月とあらゆるところに目に映り耳に届くメッセージを下さっています

挫けそうになる私を見守りあなたの背中を推してくださったあの方に

お礼を申し上げねばなりません

里を流れる小川は田を潤し稲を育て命を育む

やがてそれは大河となり海にそそぐ

水は太陽に暖められて天に昇り

再び雨となり大地に灌がれる

火と水の営みは自然界の掟でもあり不動の約束

ミズは命のミナモト

ヒは命をマモルのですね

リン

僕達是对極の経験をしてきたのです

そしてお互いの経験がともにわかるようになっていたのですね

僕達は別れて正反対の嘆き悲しみ苦しみ傷みを感じていた

今朝はまどろみの中にキミが腕の中にいるような気がしていた

ボクは遠い星の頃の名でキミを呼んでいた

リン・・・と

ラヴにはこの生涯が終わると地球世界を離れて母星に戻ることが暗示されています

あらゆる時代の家族や友人方とのお別れの時が暗示されているのです  
レイ

目覚める間際にあなたの名を呼んでいました

再び巡り逢い結ばれてあなたはエピソードをあらわしてくれた  
私の胸に過去の記憶が呼びさまされた

この七日間で遥か数千年を旅したような感じです

この気持ちを言葉であらわすことなど・・・できません

リン

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7549c/>

---

天空の虹

2010年10月9日13時40分発行